

急性期高齢患者のADL変化の検討

－看護必要度はADL評価の指標として有用か－

豊田地域医療センター 中上 裕人

藤田医科大学 太田 喜久夫

豊田地域医療センター 本樫 諭隆

市川 有紀

図2 病棟別B項目中央値

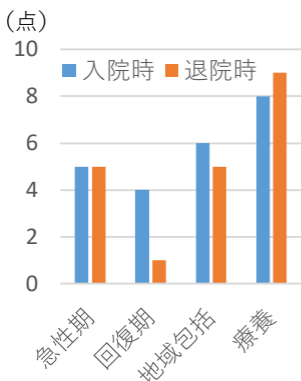


図3 転帰先別退院時B項目平均点

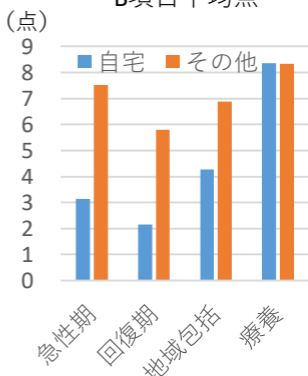


図4 転帰先別退院時B項目の重症度別人数

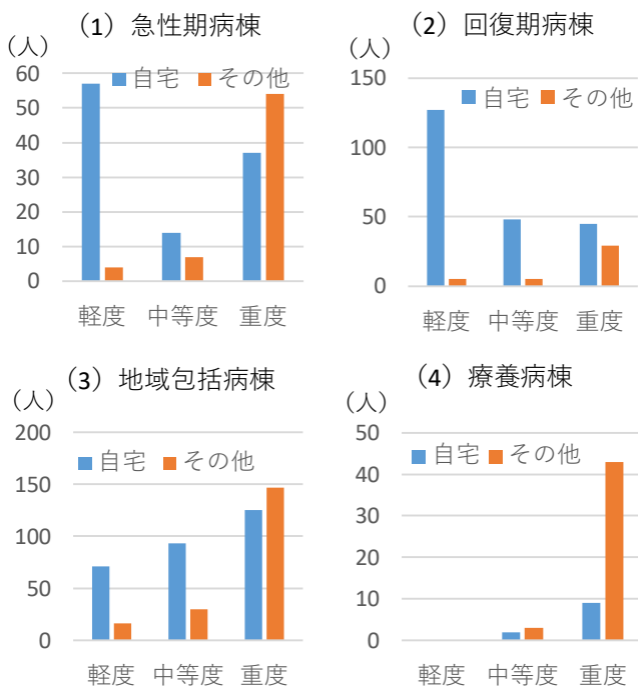
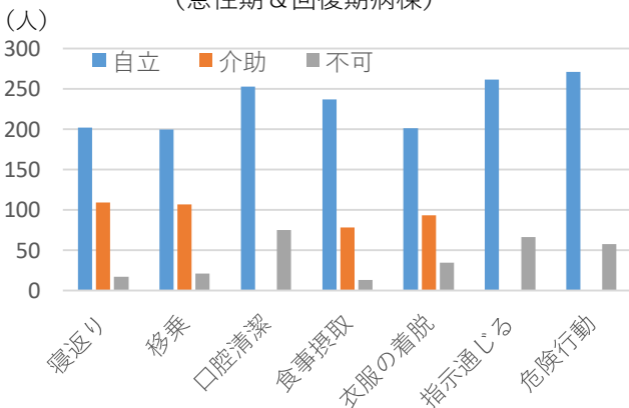


図5 自宅退院者の下位項目別自立度比較 (急性期&回復期病棟)



注1: 「口腔清潔」「指示通じる」「危険行動」には介助のランクがない

注2: 「寝返り」の介助は、何かにつかまればできるという評価基準である

調査 2

• 相関係数: **-0.843** (退院時B項目とFIMの相関)

【まとめ】

- 自宅復帰した患者の中には、中等度から重度の患者が少なくなく、自宅復帰後の支援の必要性が示唆された
- 看護必要度B項目はすべての病棟で評価されており、地域リハビリテーション医療での共通ADL評価指標として有用と思われる